

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：17301
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：21K00587
研究課題名（和文）統語構造と意味構造のミスマッチ

研究課題名（英文）A Syntax-semantics Mismatch

研究代表者

廣江 顕 (Hiroe, Akira)

長崎大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：20369119

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、統語構造とその意味解釈に乖離が生じている事例、具体的には副詞節が主語位置に生起できる場合があることを発見し、その事例の認可がどのレベルで行われているかを考察した結果、意味部門で認可されているとの結論に至った。
また、副詞節主語に代表される統語構造と意味解釈のミスマッチの事例を理論的にどう捉えるかを考察し、統語部門のみで捉えようとする、英語という個別言語ではあり得ない構造を仮定することとなるため、代案として三部門並列構造における概念構造により捉えることが適切であるとの主張を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの「学校文法」の世界では、副詞節が主語になることは記述されてもいなかった。しかし、本研究の成果として、「学校文法」が言語の構造的特性を活かした記述・説明としては不十分であることを立証した。
また、副詞節主語という、極めて周辺的事例の構造的・意味的特性を十分に考察することで、他の言語とは異なる、英語という個別言語の新しい特性が発見され、狭義の統語部門では扱うことはできず、三部門並列構造という、他の理論的枠組みが有効であることを実証した。

研究成果の概要（英文）：This research deals with a case of syntax-semantics mismatch, i.e. adverbial clause subject in English, then arguing that it is licensed not in narrow syntax but in the Conceptual Structure of Tripartite Parallel Structure.

研究分野：生成統語論

キーワード：mismatch adverbial clause subject DP-omission pseudo-cleft focus phrase

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究当初の背景として、自然言語には統語構造とその意味解釈に乖離が生じている、ミスマッチ事例が少なからず存在し、生成統語論における「極小主義(minimalism)」の作業仮説群だけでは説明できない事例として考えられていた(complex predicates (Ackerman and Webelhuth (1998), Alsina (1993)), mixed categories (Malouf (1998), Bresnan (1987), Ackerman (1998)), incorporation (Sadock (1991), Baker (1996)), coercion (de Swart (1998), Pustejovsky (1996)), constraint interaction (Culicover and Jackendoff (1997)), and default inheritance (Creider and Hudson (1999))。

ミスマッチ現象は、さまざまな文法理論が仮定する枠組内だけで説明を行うという論考がこれまで多かったが、本研究は、Jackendoff (1997, 2004)が提唱する「三部門並列文法モデル(Tripartite Parallel Architecture)」でミスマッチ事例を捉え、言語理論にとってミスマッチ現象がどのような意義を持つのか、また、「言語機能」、つまり、言語設計全体はミスマッチ現象をどのように解決しているのかを探究するという意味で、他のアプローチとは根本的に異なるものと考えている。

本研究で扱うそうした研究の潮流下において、category mismatch に分類されるとの知見を得て、ミスマッチ特性の解明を試みると同時に、言語理論研究に貢献することを示したいと考えていた。

2. 研究の目的

計画としては、本研究で取り上げる事例では、「統語部門(narrow syntax)」でなく、「概念構造(conceptual structure)」において認可されるとの作業仮説を提案し、統語構造とその意味解釈に乖離がある事例(cases of syntax-semantics mismatch)として、(1)ある特定の副詞節が主語位置に生じる例、(2)その意味解釈では、上位構造に DP が投射されていると考えられる文主語(sentential subject)、(3)直接引用構文において、引用文(direct quote)は統語的にはその伝達節(reporting clause)の付加詞になっているものの、概念構造ではその補部となっているパラドックスを、それぞれ解決を図ることで、言語設計全体のうちどの部分 - 統語部門、意味部門、または統語部門と意味部門のインターフェイス特性、またあるいは談話解釈に依存するか - を明らかにするのが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

研究初年度では、日本英文学会第 93 回大会、研究 2 年目の計画では、日本英文学会第 74 回九州支部大会、それに第 23 回日本言語科学会国際大会と、研究発表を行うことで成果の一部を学会等で問い、その後、論文として海外のジャーナルの投稿する予定であった。

4. 研究成果

当初の予定通り、日本英文学会第 93 回大会、研究 2 年目の計画では、日本英文学会第 74 回九州支部大会、それに第 23 回日本言語科学会国際大会で研究発表を行ってきた。ただ、その研究は、副詞節主語の特性の解明に取り組む過程で、新たな問題が生じたことで、当初予定していた「文主語構文」及び「直接引用構文」の研究にその射程を拡大することができなくなった。

新たな問題というのは、副詞節主語が認可される場合の統語的環境が、擬似分裂文(pseudo-cleft sentence)の環境に限られるという、新たな事実を発掘したことである。英語の場合、なぜ擬似分裂文で多様な副詞節主語が認可されるのか、当該擬似分裂文ではどういった構造的・意味的特性を示すのか、英語以外の言語では同様の観察が可能なのか、等々の疑問が次々と出てきたため、そうした疑問点を解決せずに他のミスマッチ現象には研究を移行させられなかった。

ただ、郭楊氏（関西大学外国語学部）との共同研究において、偶然、「是 的構文」(*shi ...de* construction)という、中国語の擬似分裂文の研究を進めていたことで、擬似分裂文の統語環境の解明を、中国語を手がかりに行うことになった。その研究成果は、北京にある清華大学で開催された第10回 International Conference on Formal Linguistics (ICFL10)における研究発表 Guo and Hiroe (2023)という形で成果を問うた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 廣江 顯	4. 巻 23
2. 論文標題 副詞節主語の構造的・意味的特性のより良い説明を求めて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JSL2022 Handobook	6. 最初と最後の頁 142-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣江 顯	4. 巻 13
2. 論文標題 高大接続改革の事例研究 - 「海外 English Camp」における試み -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 長崎大学教育開発推進機構紀要	6. 最初と最後の頁 49-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣江 顯	4. 巻 93
2. 論文標題 副詞節主語の特性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英文学会第93大会Proceeings	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣江 顯	4. 巻 74
2. 論文標題 副詞節主語の特性の理論的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第74回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 37-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 郭揚・廣江顯	4. 巻 1
2. 論文標題 中国語の完了相を表すwh付加詞の特異性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 福岡言語学会50周年記念論文集	6. 最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 廣江顯
2. 発表標題 副詞節主語の構造的・意味的特性のより良い説明を求めて
3. 学会等名 2022年（令和4年）言語科学会 第23回年次国際大会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郭揚・廣江顯
2. 発表標題 是的構文再訪
3. 学会等名 福岡言語学会第3回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣江 顯
2. 発表標題 副詞節主語の特性
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣江 顕
2. 発表標題 副詞節主語の特性の理論的考察
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郭楊・廣江顕
2. 発表標題 是的構文再訪
3. 学会等名 福岡言語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Guo Yang and Hiroe Akira
2. 発表標題 Focal Properties in Chinese Shi ... de Construction
3. 学会等名 The 10th International Conference on Formal Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------